「我身にたどる姫君」の方法

八嶌正治

鎌倉王朝物語と称する一群の物語の中でも極だった優秀性を示すこの物語は、物語方法としての、いくつかの特色を有している。七代の帝による四十五年に渉る物語なのであるが、巻一から巻三迄の前篇と、巻四から巻八迄の後篇に分かれている。前篇の主人公は勿論我身姫、そして、二人の貴公子が姫を恋するという人間構成になっている。宇治十帖結末に類似し、二人の貴公子の中、三位中将が薫、二宮が匂宮、そして我身姫が浮舟という事になろう。この物語が、宇治十帖的雰囲気から抜け出すのは、女四宮という女性が三位中将の正妻におさまってからである。極端に嫉妬深く、夫をつねったりひっかいたりし、一日中夫の側を離れない。ともかくも巻二あたりから、独自の人間性・人間関係を描き始めるのである。方法論として、独特・且面白いのは、前編と後編との間に十七年間の余白を置いている事である。余白を置くと、物語が断絶し内容が二分されるかと言えばそうではない。この間隙は文字通りの透き間ではなく、時間的には一種の盛り上りを見せているのである。「一種の」というのは、「方法論による独自の盛り上り」と言い換えてもよいかもしれない。巻三末は、女三宮・女四宮・我身姫の妊娠の記事で終っているのである。

一　―時間操作について―

後篇は次のような書き出しから始まる。

八月十五夜、隈なき月影には、いとあくがれ出づる心にまかせて、そこはかとなく誘はれたまひぬれど、かひなき雲居のかげもなかなか心づくしなるものから、御覧じつけられては、暇許されずやとわづらはしければ、いみじう忍びて宣耀殿に立ち寄りたまへれば、語らふ戸口もかひなく、参うのぼりにけり。「宮(人々)もこの御方にて、御琴など弾きすさびおはします」ときこゆれば、あいなくうち嘆かれて、

立ち帰りたまふ。

麗景殿の東に、宮の中将さしあひて、「暮れつるままに、『いつしかも参りたまはぬかな』と御尋ねありつるを、『例の行方なく惑はしきこえて。え尋ねあひたてまつらず』と蔵人の奏しつれば、よろづは映えなくなりて、入らせおはしましぬるに、いとあやしうもありけるかな。今だにとく参らせたまへ」と言ふ。

八月十五夜、くまなき月にそぞろ浮かれ出ずる若者、目的が達せられず、溜息をついてそのまゝ帰ろうとする折、麗景殿の東の所で宮の中将に出会う。宮の中将の話だと、帝は日が暮れると、早速あなたをお探しになったとの事である。この主人公の方は、名称もしばらくは出ず、相手が宮の中将という名である事が告げられるだけである。そして行く先の話をあれこれしている中に、主人公は、「なほ都の内は、入道の宮こそ人目まれなるを、参りたまへ」と、「心に入るままにおし寄せさするを、我しもそこと思ひ分く心しなければ、うち忍び二人ながら参りたまへり」と、宮の中将は、特にどことという目当てがないので、二人揃って入道の宮へ参上する事になる。そこは、比較的時めいているけれど、その女性は「我が御身に思し慣ひにしかば」と、御自分の体験に照らし合わせて、男性には極めて用心深い。そこには、「いつき出でたまふ姫君」(後涼殿中宮)もいる。又、「昔の中納言の君」という言い方で紹介される女房は既に出家しており、小宰相というその娘の方が紹介される。小宰相は、親ゆずりのたいそうな風流好みの若女房、早速に主人公に歌を詠みかける。

雲の上の月を見捨てて尋ねくる　人の心の色ぞことなる

といふも、折からはをかしきにや。殿の中将、

心をば分けつる露にとどめおきて、雲居の月はみる空もなし

宮の中将、

時の間も心離れぬ宿しあれば　雲居の月ものどかにぞ見ぬ

こゝで初めて、もう一人の主人公の名「殿の中将」が明らかにされる。

「昔の中納言の君」という言葉や、入道の宮があやまちを犯して出家したらしい事が朧げに読者の脳裏にイメージされる。しかし、まだ、定かではないが、中納言の君の娘小宰相が若女房とされているので、前篇からの長い時間の経過が何となく予想される。

遊び足らず、二人は次いで嵯峨院に参上する。巻三では嵯峨帝であった方で、姫君を一人お持ちである。後に東宮に参内し承香殿皇后と称される方で、「これも姫宮のおはします御簾の前を、死ぬばかり思ふべし」とあって、二人共に姫君の御簾の前を通る時は、胸がおどって死にそうになったとある。成人しており、帝が院になり、それから、ある程度の年月がたっている事が知らされる。次いで殿の中将の歌の紹介

の後、「物怨じさがなくしたまひし宮の御腹なり」と記され、この殿の中将が前篇の女四宮（物怨じさがなくしたまひし宮）と三位中将との間に生れた子である事が明らかにされる。このすぐあと、「宮の中将ときこゆるは」と、この摂関家系と対応する皇室系一族の概要が示され、最後に次のような形で紹介を終る。

入道の宮ときこゆるは、式部卿宮の御妹、関白殿の末におはせしよ。女君持たまへり。春宮の母后、並ぶかたなき御おぼえにて、一品宮・女二の皇子さへ生み続けたまへるぞ、「我身にたどる」とかや思し乱れし御上なめる。

こゝの文章、少々解釈しずらいが、入道の宮（女三宮）は式部卿宮（二宮）の御妹で、関白殿の晩年に御輿入れなさった方ですよの意である。姫君をお持ちとあるが、実際は三位中将との子で、後に後涼殿中宮と申される方である。東宮の母后は、帝の御寵愛を一心に受けて、一品宮と女二宮迄お生みになったが、その方が、あの巻一で、「我が身にたどる」とか思い悩んで居た方のようだ、とある。

この後、同じように、筆は摂関家側に移る。そして最後に嵯峨院の事を記され、「姫宮一所ぞ持たせたまへる」と記しているから、姫宮が一所であり、こゝを記述している作者の脳裏には、巻六で活躍する前斎宮の事は全くない。以下、この姫君の去就に悩む嵯峨院を記し、最後に、「あなたこなたとあくがれたまふ君達ぞ、昔の御上どもには勝様（まさざま）に、隈なく紛れたまふべき」とあって、巻一～巻三の三位中将や二宮以上に、残る隈なく、女のため至る所に忍びこまれるらしいと記して居る。この一条で、ほゞ、前篇の諸人物のその後の動静は語り尽されたといってよい。以下筆は、九月十三夜の諸人物の行動に移るが、この冒頭の八月十五夜の記述で、特に読者の中に感慨を催させるのは、時間の経過という事である。除々に明らかにされる、殿の中将と宮の中将の存在、そしてその周囲の状況。「「我身にたどる」とかや思し乱れし御上なめる」とか、「昔の御上どもには勝様（かちざま）に、隈なく紛れたまふべき」とか記す、その「昔」は、既に遠く、一つの世代交替が告げられているのである。それでありながら、この物語は、源氏物語のように二世代画いた物語ではない。源氏物語の正篇部のみ、即ち光源氏の生涯を画いた位の時間感覚しかないのであるが、それでも猶且、これ程の時間性を感じさせるのはこの作者の構成上の工夫、腕によるとしか思えないのである。我身姫を時として想起させ、前編とよく似た二人の貴公子の行動から起筆するのも、それを前編と重ね合わせ、時間の推移を記述なしに読者に弥が上にも感じさせる為である。巻五冒頭の水尾中宮の死から始まって、巻五を中心にある程度の人物の交替はあるが、その事によって時間性を感じさせようとしているのではなく、飽く迄、前篇と後篇の設定と言う事で読者に時間を感じさせているのである。我々は、今記述した部分を読む事によって、溢れるような或は押しよせる

ような時間感覚の中に浸される。

整然とした物語である。巻八、殿の中将は、春日に御参詣になると、明神の御神託をまざまざと御覧になる。それは、「柞原八重立つ霧は隔つとも　尋ねて照せ秋の夜の月」で、娘を探せの意である。そしてこの件が落着し、「月日は程なければ、左の大臣の女御参りたまひにき」とある。この「月日」は明確ではないが、忍草の誕生・成長から見て、五年と推定される。嵯峨院の崩御があり、次いで、「おほき大殿隠れたまひにき。左大臣は、なほ大将かけながら、内覧をぞしたまひし」と、関白（三位中将）の死と、殿の中将が内覧の任に当った記事が続く。次いでいまだ独身の宮の中将の顛末が語られる訳であるが、このように、この物語の中枢部は殿の中将と宮の中将が実にシンメトリカルに組み立てられているのである。この物語が二代の物語というより、一代の物語という面持が強いのは、嵯峨院・三位中将・我身姫の死が巻八に於いてゞあり、消息は消えるが、女三宮（母・皇后宮）、女四宮（母・水尾女院）は、全巻生存していた気配が強い。中に十七年の空白を置くからと言って、決して、三位中将と殿の中将の二代の物語ではなく、我身姫を中心とする一代の物語なのである。

当初の雰囲気は宇治十帖に類似するが、この物語はこのように最初から大きな結構が与えられている。それは帝を中心とする摂関家系と皇室系の妃の対立であって、両者は大きく、水尾帝を挟んで、摂関家系の水尾女院と、皇室系の皇后宮と言う、性質の異なる系譜として設定されている。摂関家系は血脈・家系の強さを誇り、現世的なしぶとさは絶大である。水尾女院―女四宮―藤壷皇后―三人の帝という形で、自己の勢力を拡大して行くが、一方、皇室系は高貴さの象徴という形で、皇后宮と女帝の造形の中にその典型を示す。この両者の融合がこの物語の一方の大きなテーマなのである。この対立の具体的な様は、巻五冒頭の水尾女院の死「をりあしき大女院の御事さへ出できにしに」迄続くと見てよい。抑々、我身姫自体が、関白と、皇后宮との密通の子であって、一見、宇治十帖と似た状況ながら、全く別の方向へ主題が動いて行く事を示唆しているのである。そして、この皇室系の皇后宮は典型的な美しさを示しながら、巻一で、はかなく潰えてしまうのである。

この物語は最後、濃絵のような色濃い世界が展開する。宮の中将は、「むげに老いの御歳といふばかりまで」（後文に「三十に多く余りてぞ」とある）独身だったが、奈良の方で二・三日お過ごしになった途中で、「何の重なりなき色あひ」（地味な身なり）の娘に、「いとあさましく覚えなきに、はやく御心とまりけり」、全く意外であきれた事に……と、この経過を記している。長い独り暮らしの果てだから、世間の人もどんな事になるのだろうとその顛末を面白がって居るだろうと、自分でも憂鬱になる程気になさったが……

A限りなくあはれとのみ思し染まれんをば、いかがは思し捨てん。

関白殿にさぶらひける中臈の、ものの数ならぬが、身の程より容貌あるありけり。わざとの御心動くばかりにもあらず、ただ夢ばかり引き動かせたまひけるに、さるあやしきことの身に出できにけるを、女宮の御心おきて、女院も添ひおはしましし時にて、きこしめしほどきて、身にあまる御顧みになるかたもえ知らねど、まづさしあたりて、いかなる耳を聞かむとわななかれければ、なやみて失せにけるよしを聞えて、跡絶えにけるが、……

「女宮の御心おきて」とは、女四宮の御意向のことであり、「女院も添ひおはしましし時にて」は、水尾女院も御一緒だった頃だったので、の意である。そんな気強い二人が側に居たので、「わななかれければ」、恐ろしさに身体がふるえてきて、行方をくらましてしまったのである。そうした過去の出来事が、何の前触れもなく、「関白殿にさぶらひける中臈の」から始まるのであって、この物語の難解さも、時間感覚に関するこの無頓着さが一因を成しているのである。

悲恋帝の喪も明け、仲の良い殿の中将と宮の中将はしみじみと過去を語り合い、宮の中将は中臈女房との出会いを説明する。すると殿の中将は、自分の異母に当る人なので、Bあまりかひがひしきまでうち泣かれたまひぬ。さるは、かたちなど口惜しからで、あはれと見し人ぞかし、今思ひ合すれば、ただ今の心地ぞする。ものをいみじと思ひ入りて、渡殿の戸口にながめ入りたりしを、おともせで見しかば、

思ひわび四方の嵐に迷ひなば　とまらん露を人も知らじな

袖を押し当てて泣き入りたりし後を、あやしさに引き動かししかば、見付けて、顔はいたくにほひながら、少しうち笑みて、「やがて御覧ぜられぬ身ともなりはべりなば、大人にならせたまひて思しめし出でなんや」と言ひしままに、げにまたも見えざりし人ぞかしと思すに、いとあはれなれば、御袖もいたく濡れぬ。

「さるは」からが、殿の中将が昔の出来事を回想する場面になる訳であるが、これも、「あまりかひがひしき」と形容されているように、殿の中将のその話に対する反応があまりに早かった事を意味する。「今思ひ合すれば、ただ今の心地ぞする。ものをいみじと思ひ入りて、渡殿の戸口にながめ入りたりしを」と、その状況迄、印象画風に描き出すのである。この描写なども、前に、宮の中将の話がなければ全く突然の話であって、その関連が、初めて読む読者には大変わかりずらい、これがこの作品を解読困難な物語としている理由と考えられるのである。以上、この物語が、時間を自在に扱っている様子を摘出してみたが、問題は、三位中将と中臈との間に、宮の中将の北方は生まれたのであるから、三位中将の子、殿の中将とは、異母兄妹に当る。既に三位中将の子・後涼殿

中宮と、宮の中将は密通の関係で初草を儲け、又、宮の中将の同母妹・麗景殿女御と、殿の中将は密通の関係で忍草を儲けている。二重の義兄弟の関係が成立している訳で、その上に猶且、三位中将の異母妹を、宮の中将の北方に設定するこの意識は、殿の中将と宮の中将を、もっと濃い血の中に沈めようとする意図を作者は最後に抱いた為に相違ない。特に宮の中将は、殿の中将の二人の異母妹の中、一人とは密通して子・初草を儲け、一人は北方として初草の正式な母の役を担わせるのである。

派手な宮の中将が、四十近く迄独身で居た上、地味な女性と結婚するというのも、人間の真実を突いていると思われるが、引用文Aは、「つれなき人の御耳などは、いかばかりか思しつつみしかど、限りなく……」（引用A冒頭部）から続いている訳で、こゝで言う「つれなき人」とは後涼殿中宮の事である。文章は直ぐに調子を変えて、「関白殿にさぶらひける中臈の、……身の程より容貌あるありけり」と、既成事実を客観的に語り出す。今迄全く触れる事のなかった人物の紹介である。そしてこの人物は、殿の中将の回想（宮の中将に語って居る訳ではない）中の状況描写によって具体性を帯びる事になるのである。何と好都合な人物設定だろうと思いながら、あまり間を措かず殿の中将の状況描写がある事によってこの話はリアリズムを獲得する。宮の中将は、「かの昔見けん人の上よりうち始め、思ひの外に見付けたりし程の事を、つきづきしう引きなほしつつきこえ出でたまへるに」とあるから、この時初めて後涼殿中宮の話をした訳で、次いで、思いもかけず北の方を見付け出した時の事を、もっともらしく、所々うまく言いつくろいながら話したのである。殿の中将も又、忍草の事を語り、二人は深い縁で結ばれている事を了解し合うのである。

○

巻六は、巻五の並びの巻と称しても、巻八より後に書かれたものと考えられる。冒頭に大納言の尼君の館がレスビアンの巣窟のように記されるが、これは覗見している宮の中将の目を通してゞある。そしてこの一節だけが、時点を逆にして、巻六の物語中のエピソードなのに巻頭に配置されるという、不思議な構造を示しているが、これは、この館の雰囲気をまず読者に知らしめるという所に意図があると考えられる。この一節の終った後、次のように語り出される。

大納言の君、思ひつかざりし人の、おはし所なくて移ろひゐたまへるばかりなれば、差し出でて御後見きこゆべく思しおきてしかど、事様ほの見たまひしに、いとよしなし、老いての果に我身もけしからぬ名もこそと、あいなかりしかば、仏の御前に深くたて籠りて、悪し良しものたまはず。

大納言の君は、前斎宮の母・御匣殿の妹に当る。前斎宮の様子をちょっと御覧になって、こちら迄悪い評判を立てられてはと仏間の奥に籠ってしまう。これが物語年次（物語冒頭を

第1年として）の29年、次いで30年の記事になるが、この年には大きな事件はなく、前斎宮の中将の君への愛が次第に小宰相に移って行く様が描かれるのみである。以下前斎宮の日常が暫く記され、「年のはてには」とあるから一年の経過が示されるが、次いで次のような文章が入る。「これはみな過ぎにし宮のことにこそ。その後は」とあって、「過ぎにし」とは冒頭の記事よりも遡る時点の出来事、「その後は」の「その」の時点も明確ではないが、中将の君の怨み、自身にものゝけがついた事等の騒動があり、その後に「嵯峨の女院の御事出で来にしかば」とあるから、こゝ迄が冒頭部より前の時点の事を記している事がわかる。嵯峨女院崩御の後に冒頭の件がある事は、嵯峨女院崩御等、この巻と同時点の事を記す巻五によって明瞭である。次いで次のような文章に移る。

五月雨の、常よりも晴間なき頃、御前の勾欄のもとに、さばかり用意なき御身ならぬを、いかなりけるにか、なべてならず染み深き扇ぞ落ちにける。…

冒頭の、覗き見の宮の中将のものである。この部分、宮の中将の垣間見と同一事を再述するが、こゝは覗かれた女達の側から書いている。文章が、突如「五月雨の、常よりも晴間なき頃」と変った時、果してこれが、冒頭部と照合する時点の事である事が読者にはすぐ解るであろうか。こゝに、この物語の時間を前後させても平気な無頓着さがあると共に、ある特殊な時間をクローズ・アップさせる手法の面白さが存するのである。

巻六は、こうした時間の問題の外に、青女房の動静を記している部分も多く、この物語に、底辺への広がりを与えている。この巻がなかったなら、この物語は、全体が当初構想された通りのすっきりした構造で統一されてしまう。むしろ、源氏物語の中の宇治十帖的な物語としての異質さはこの巻六に与えられているといってよいであろう。私はこの巻がある事によって、単なる上流公家の物語を越えた、当時の幅広い社会相を記す物語として、扱う人間相に幅を与え、物語全体の色彩の多様さに寄与していると思われるのである。

二　―我身姫の位置―

我身姫は、この物語では時として端役のような扱いになると認定される向きもあるが、(注1)極めて重要な位置を担っていると考えられる。この注にある「物語の統一性のシンボル」という言い方の内容がどのような事を意味するのか不明だが、私は実質的にも、この物語の主人公とするに相応しい人物と心得ている。それ故にこそ、作者はこの物語を『我身にたどる姫君』と名付けたのであろう。巻一劈頭に彼女の詠ずる歌に「我身にたどる」の語があるが、後篇でも、比較的初めの方に、「「我身にたどる」とかや思し乱れし御上なめる」とあるように、常に読者に過去と主人公を想起させる方法をとっている。後篇は二人の若者の行動から始まるがその直前に、

「物怨じさがなくしたまひし宮の御腹なり」とあり、三位中将の子、殿の中将の身分があかされる。続いて、「宮の中将ときこゆるは、院（嵯峨院）のひとつ后腹に、いといたう色めき過ぎてきこえたまひし、今の式部卿宮とておぼえやんごとなくものしたまひしが、同じ皇子（同じく皇女の前斎宮と結婚なさって）たち前の斎宮にすみたてまつりたまふ腹になん」とあって、殿の中将と並んで後篇で活躍する宮の中将の事が紹介される。後編の冒頭不明だった、二人の貴公子の身分が明らかにされ、読者の中に、前篇の二人と別人である事が知らされたその直後、先に引いた我身姫の紹介がある。つまり後篇の冒頭で再び、読者に、想起せよ、と云う文脈で我身姫が扱われ、巻八大尾の、我身姫の死去に際しても「我身にたどる」とかや、はじめより聞えたまひし御上よ」と、常に、我身姫は、読者に、物語の過去・骨幹を想起する形で扱われる。

では、我身姫は、実際に、この物語でどのような位置を担っているのか。

我身帝譲位と共に、三条帝の妃四人が、巻四の、比較的初めの方で紹介される。その四人の妃に対する、三条帝の母・我身姫の動きは極めて明瞭である。

A女院（水尾女院）の御おきていとどしうのみなりまさらせたまへば、（我身姫は）いみじきことを思しめせど、……入道（女三宮）の宮ぞ、世を憂きものに思しまさりける。……（帝は）うちはへ後涼殿にのみおはします。……中宮（藤壷皇后）は、つきせずめざましきものに思したり。母后（我身姫）は皇太后宮ときこゆ。我が御位を譲らんとおしたたせたまふに、またこれもいと避りがたきにや、三人は例なきこととかたぶく人多かれど、なほ后に立ちたまふべしと聞ゆ。されど、女院（水尾女院）のいみじうのたまはせむつかれば、いましばしと思すなるべし。うちうちの御おぼえは、月日にそへてけしからぬまでに聞ゆれば、なほ行末頼もしき御ありさまなり。

傍点の「いみじきこと」とは形式上、我身姫の異腹の妹である後涼殿中宮を立后させる事である。実の母女三宮は逆境に立って、世の中はいやなものだという思いが募って来る。藤壷皇后は先に立后しており、三条帝が溺愛する後涼殿中宮を、どこ迄もなまいきな人だと気嫌いしている。その祖母の水尾女院が又、いよいよ野放図になって指図しているので、我身姫としては大変やりづらい、これがAの引用文の状況である。

B皇后宮（承香殿皇后）にぞ、さらに何とも思さざるべき。太后宮（嵯峨女院）よりは、いとおいらかに清らなる御心おきてなれば、（藤壷皇后に）御使など奉らせたまひ、御よろこびもたち返りきこえさせたまふ。皇太后宮（我身姫）、なかなかこなたざまいとほしかるべきことを、下には思さるべし。

藤壷皇后が男子を出産するというような状況の中で、承香殿皇后は父の居る嵯峨に退出しており、応揚で心がけの美しい所から後涼殿中宮の悲嘆とは反対に何の反応も示さない。承香殿皇后の母の嵯峨女院と我身姫とは父が共に故関白で、

異腹の姉妹である為、かえって、叔母の我身姫の方が承香殿皇后について気を揉んでいる様がBで描写される。次のCに至ると、「故殿の聞えおきたまひし」という言葉が出て来る。この事を示す事実はこれ以前には出て来ないのだが、極めて不明瞭な発言である。自分の子であると言ったのか、息子の子であると言ったのかの了解に苦しむのである。(注2)

C皇太后宮(皇太后宮)、いといとほしきことを思し乱れて、なほわが御位を譲りきこえんとのみ奏せさせたまふ。関白殿(関白)も、故殿の聞えおきたまひしを思し忘れねば、さらに御むすめの御上にも思しおとさねど、ただ女院(水尾女院)などの、「三人の后と聞きならはずもあるかな。時の后の皇太后宮といはるるは、いとまがまがしかりける御代の末にありけるとかや。あるまじのことや」と、諫め申させたまふに、わづらはしうて、えしも思しめしたたぬなるべし。

傍点の「御むすめの御上にも思しおとさねど」は、御自分の娘の藤壷皇后と全く同様に考えていらっしゃるものゝの意であり、事実、後涼殿中宮と藤壷皇后とは異母姉妹なのである。そしてついに、三条帝譲位と共に、後涼殿女御は中宮（皇后と同位）になるという事になる。即ち巻四で、我身姫は、後涼殿中宮・承香殿皇后の側に立ち、大きな布石を敷いているといってよいのである。巻四の終末近く、次のような記事がある。

世の中なべて黒みわたりて、よろづはえなき年なれど、さるべき御契りにや、中宮(藤壷皇后)には男宮(一宮)、式部卿宮には女宮(麗景殿女御が女宮出産)にて生れたまひぬ。後涼殿のみぞつきせず思ししづむべき。今の二宮をば、皇后宮(承香殿皇后)にせちに聞えさせたまひて、もてかしづきたてまつらせたまふ。大宮の御ゆかり、いとうるはしき御なからひなれば、誰も思しゆるすべし。

こゝにある「大宮の御ゆかり」は、今井訳では、「皇太后の御血縁で実に折目正しい御間柄だから」と訳されている。この「大宮」は我身姫である事は、その前の一文、「一品宮も、いみじきことを思し嘆くなかにも、いかでこの御本意をと思しめせど、大宮ののたまはせ出でぬには、さかしうもえ聞えさせたまはず」（一品宮も父帝の崩御をお嘆きのあまり、ぜひ御自分も出家の本意を遂げたいとお思いなったけれど、母皇太后(我身姫)が仰せ出されないのだから、こざかしく申し上げることはお出来にならない）の一文と同じだから、「大宮」は我身姫に異ならない。こゝの文脈は、我身院が突然病気になり、その上あっけなくお亡くなりになったという意から始まるのだから、主題は我身帝・我身姫であり、「大宮の御ゆかり」は、我身帝の妃我身姫の子・三条院とその妃藤壷皇后との間に生れた第二子が、やはり、我身姫にとっての「御ゆかり」であるといってよかろう。即ち、この部分は、女帝を主にし、女帝にとっての「御血縁で実に折目正しい御間柄」なのではなく、亡くなられた我身帝とその妃我身姫にとって「実に折目正しい御間柄」なのであると考えられる。即ち、我身姫は、

自身、関白と皇后宮の密通の子という宿命を負って、我身帝という摂関家側の帝の、その孫に当る人物が、女帝という皇室側の嗣子になるという繋ぎ役の、重要な要(かなめ)役となっているのである。この女帝の嗣子、藤壷皇后の第二子は、物語最末部の今上であり、皇室・摂関家融合という系譜形成の上で重要な役割を担っているのである。巻八での書きぶりも、読者に過去を喚起するような口ぶりである事は既に述べたが、我身姫は、巻七の主人公である一品宮と悲恋帝の悲劇の経緯にずっとつきそっている。即ち、出番・恋愛心理描写の少さを別にしてこの物語の皇室系・摂関家系統合の系譜の最大の主人公であり、この事は作者も充分に承知して書いている所なのである。即ち、この主題は次のような形で結末が示されるが、我身姫は明確にそれに関与している。

院の上、太皇太后宮、皇后宮、みな四十に満たせたまふべき歳は、御賀の事などかねてののしりしかど、いと口惜しうあへなき女院の御事に、よろづいふかひなし。「我身にたどる」とかや、はじめより聞えたまひし御上よ。皇太后宮の御事の後、尽せぬ御嘆きによわらせたまひにしなり。一所の御事だにいとあさましきを、その明くる年、院の上さへうち続きたまひにし。

この物語の主人公、我身姫と、表面上主役をつとめる三条院の死が、こゝで告げられる。冒頭は、三条院・藤壷皇后・後涼殿中宮が揃って満四十歳になり、祝いの話等で騒いでいたが、我身姫のあっけなかった崩御の為に総て取りやめになる。我身姫は一品宮逝去のあとの、大変な御悲嘆がもとでお弱りになったのである。後涼殿中宮も、初草姫が行方不明になった事で頭を下ろしてしまう。三条帝・後涼殿中宮の決着のついた後の宮廷の有様を次のように記す。既に忍草は今上に参内しているのである。

（初草姫を）今より春宮にと思し設けたり。をさなき御心にもあさましくおぼほれたまひにしかど、こまかに聞え知らせたまはんにさへは、いかがは背きたまはむ。ただ母宮の御恋しさをぞ、忍びね泣きたまふ時多かる。大宮は、さまざまはかなき世を御覧ずるにつけて、「この世の色をのみ」とのたまはせし御気配は、はづかしく思ひ出できこえたまへど、月日に添へては、ただ御心ひとつなる世を、なほえ思しめし離れぬにや、尽せぬ御内住みなり。

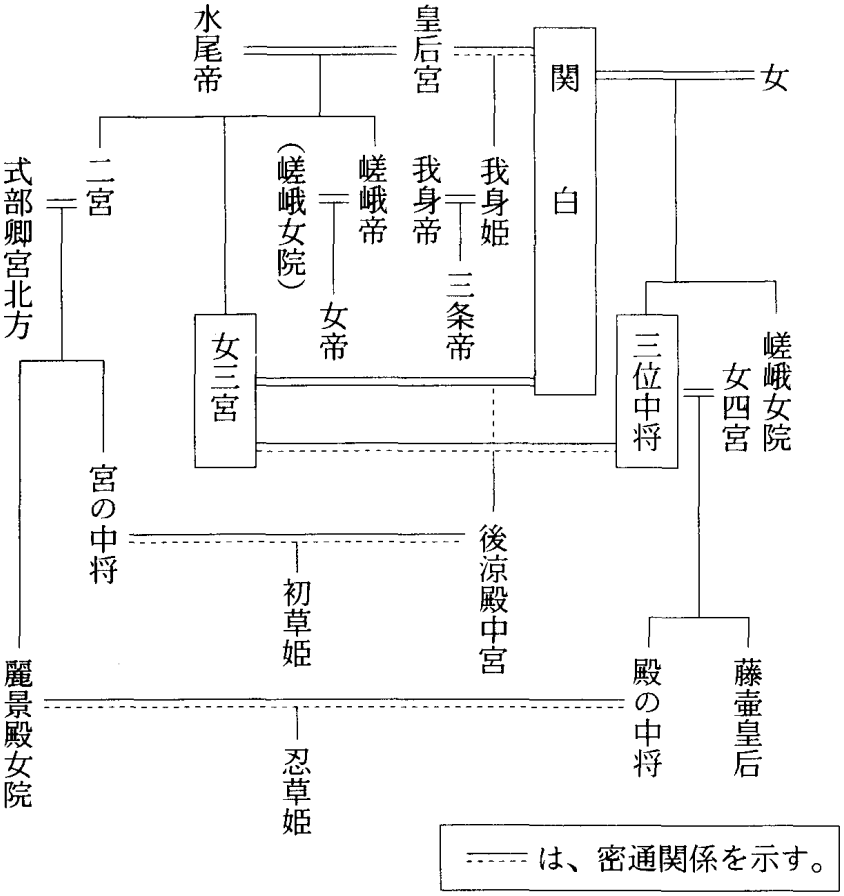
東宮に宮の中将の初草姫が入る事で、物語は大団円を整え始める。「この世の色をのみ」とは、巻八の冒頭で、藤壷皇后の夢に故女帝が現われ、風雅集所収の徽安門院の歌と同様な扱いをして、「俗世の色を早く捨てて」と語った事を指しているが、それに反し、「憂き世の色にのみ染っている事」を恥じているのである。しかし、今上・東宮の親であり、「御心ひとつになせる世を」捨てる事が出来ないのである。

巻四末女帝即位、女帝と藤壷皇后とは仲がよい。巻五冒頭で次のように記されている。

二の宮の御ゆゑ、もとより皇后宮にはいとむつましく聞えかはさせたまひしを、……

「二の宮の御ゆゑ」とは、巻四巻末、女帝即位直前に、先に引用した「今の二宮をば、皇后宮にせちに聞えさせたまひて、もてかしづきたてまつらせたまふ。大宮の御ゆかり、いとうるはしき御なからひなれば、誰も思しゆるすべし」とある事をさす。この記事の直前に我身帝の崩御がつげられ、結局、藤壷皇后にとっては、我身姫は祖父・関白の異母妹、又、女帝にとっては、我身姫は、即ち、祖父・水尾院の同母（皇后宮）異父（関白）の妹という事になり、藤壷皇后・女帝両者を繋いでいるのは、関白と皇后宮の通密関係という事になる。藤壷皇后と女帝との仲の良さは既に触れたが、藤壷皇后は関白側に関係し、女帝は皇后宮側に関係する。我身姫の出生の秘密は、既に巻三で明確化されているのであるから、「大宮の御ゆかり」の「大宮」とは、関白と皇后宮を結ぶ唯一の人物、我身姫という事になろう。その我身姫は、他ならぬ三条帝の母なのである。そのような意味で、我身姫は、この物語の影の部分で、極めて重要な役割を荷なわされているのである。皇后宮と関白の関係は、次代にも荷負わされ、皇后宮の子・女三宮と、表向きは関白の子であるが、実質は、関白息の三位中将との間に生まれる後涼殿中宮に引き継がれる。後涼殿中宮には皇子は出来ないのであるが、宮の中将との間に密通の子・初草姫を生む。女帝の養子が第二皇子であるという事は、この物語の最後の時代、今上帝の時代がその第二皇子の時代に当っており、水尾帝・嵯峨帝・我身帝・三条帝・女帝・悲恋帝・今上帝という七代の中、水尾帝・嵯峨帝・女帝・今上帝と云う聖帝の流れが、精神として、血脈で繋がる水尾女院・女四宮・藤壷皇后・今上帝の中に流れ込んで居るという事であり、摂関・皇室結束しての王朝復古の精神は回復されたと言ってよく、それが、この物語の中心部、三条帝時代の、藤壷皇后と女帝の仲の良さの中に具体化されていると見てよかろう。特に聖帝四人の中の後半二人、女帝・今上帝に我身姫の心が流れ込んでおりそのような意味で、この物語は、精巧に組み立てられた、我身姫の物語なのである。

我身姫崩御の話は次のような文章で始まるが（「院の上、太皇太后宮、皇太宮、みな四十に満たせたまふべき歳は、御賀の事などかねてののしりしかど」）、この人達は、それぞれ、三条院、藤壷皇后、後涼殿中宮である。共に、前篇の最末で、我身姫・女四宮・女三宮の妊娠の結果の人物であり、三条院を物語の中枢に据えようとする意志は最初からあったと見てよい。三条院崩御、後涼殿中宮出家、という形で結着がつくが、この巻八は今上帝の時代の巻、その今上帝は、女帝の養子であり、我身姫の縁で纏ったものである。巻八の初め、故女帝の夢での発言に「今上の在位三十六年、……」とあるが、明らかに女帝の精神は今上帝に引き繋がれているのである。その際の、我身姫の役割を蔑ろにしてはならないと思われる。



影のような存在として扱われていても、この物語は標題通り、「我身にたどる姫君」の物語なのである。

この物語には、陰と陽の人間像があり、陰は、系図上、或は政治上、影の力として働いており表面に出る事は少いものゝ重要な人間関係を形造っている。この件に関係してこの物語には「夢」と「夢告」が現われるが、「夢告」が物語に重要な方向性を与えている。政治上・系図上、我身姫が重要な位置を占める事は既に述べた。藤壷皇后と三条帝の間には、三人の皇子が居り、血統上は、悲恋帝・今上帝・東宮の三代を形造り、摂関家系が皇室を継ぐが、精神的には皇室系が高貴なる系譜を形造り、略系図を示せば上図の如くである。「夢」と「夢告」が多く現われるが、物語に方向性を与えるのは「夢告」の方である。「夢告」には次のものがある。

1巻三　故皇后宮、関白の夢枕に立ち、歌を詠む。
2　同　故皇后宮、二宮の夢枕に立って戒める。
3巻五　故嵯峨女院三周忌の法華八講。故嵯峨女院、藤壷皇后の夢枕に立ち、女帝と贈答歌。「後三年の在位」と告げる。
4　同　女帝、三条院の夢枕に立ち、告別の歌を詠む。
5巻八　今上帝発病。八月十五夜、故女帝、藤壷皇后・今上帝の夢枕に立ち、在位三十六年と告げる。帝の病癒える。
6　同　殿の中将、春日参詣の折、霊夢を蒙って落胤を探せ

と教えられる。

1の巻三の「夢告」であるが、関白の夢枕に立って、故皇后宮が、

さめぬ夜の夢の契りのかなしさを　この世にさへもそへて見るかな

と詠んで居る。「さめぬ夜の夢の契り」とは、この物語に常に影として存在する主人公の我身姫の出生に関わる関白と皇后宮の密通の事であり、「この世にさへもそへて見るかな」は、我身姫が同じ過ちを起しそうであるとの暗示をしている。我身姫が我身帝と結ばれるのはその後であるからこの夢は意味をなさず、単に同母異父・同父異母と関係する事の危機を示しているだけである。その意味ではこの物語は厳密で、密通といえどもそのような関係は画かれていない。2は、故皇后宮が二宮の夢枕に立って、

思ひ草もとの葉むけは知らずとも　結ばん根とはかけずもあらん

と詠み、二宮に我身姫との密通を止めるようにと説いている。系図に見るように、二宮と我身姫は、母を同じ皇后宮とするからである。1は単なる暗示にとどまるのに反し、2の方は、一種の示唆的な要素を持っており、物語に方向性を与えるものとなっている。そして巻三の、この性格の異なる夢告は、三位中将と女三宮の犯してしまった過ちと、二宮と我身姫の失敗に終った過ちに少なからず影響を及ぼしている。3の巻五の夢告であるが、藤壷皇后の夢枕に嵯峨女院が立ち、女帝と贈答歌を詠み合うのであるが、この夢の性格は、女帝のその後を暗示するものという色彩が強く、1の巻三の故皇后が関白の夢枕に立つという、当事者でない者に対して夢告があったのと同様な手法と解し得る。同じ巻五にある4の夢告は3とは異なり、女帝が三条院の夢枕に立ち告別の歌を詠むというもので、

色に出でん秋の涙のかひもあらじ　月の都に契り絶えなば

と女帝は詠んでいる。女帝は三条院の夢枕に立って特別な別れをし、契の深さを証明するものと考える事が出来る。又、この夢告の後に女帝が死を迎える事で、やはり方向性を持つ夢と結論づけられるのではないかと思う。5の巻八の夢告は、今上帝が発病した最中の八月十五夜、故女帝が、藤壷皇后・今上帝の夢枕に立ち、在位三十六年と告げたものである。これは、神託のように当事者に対して行われる夢告であり、この夢告から醒めた時、今上帝の病が平癒する。

これ等以外にも、巻七で宮の中将と後涼殿中宮との密会の夜に三条院が見た夢、或は、同じ巻七で、一品宮が悲恋帝に犯される前に連夜帝を相手とする性夢を見るというような夢があるが、これ等には夢を告げる者が存在せず、夢告というよりは夢見という方が当っていよう。このように、この物語は、夢告が特別な意味を持っており、巻三では故皇后宮が、巻五・巻八では嵯峨女院・女帝が物語の影として存在し、物

語の方向性を与えていると考えられる。そして既述したように、これ等、夢告の指示者は総て皇室系であり、摂関家系の血脈に精神性を与えているのは、曽て対立した、水尾女院対皇后宮の中、女帝の母である嵯峨女院も含めて総て皇后宮側なのである。

この物語では八巻ある中巻末に三人の女性が死ぬ。作者構想中の、意図あるものと思われる。巻一では皇后宮、巻五では女帝であり、巻七では一品宮である。巻七の場合は悲恋帝も崩ずるが、この件りの記述は迫力もあり、又重要でもあるので、その意味については別稿に記す。皇后宮は、勿論、我身姫の内密の母でありその事について関白に後事を託す。その部分は次のようになっている。

「……春宮の御事、とり分きてはぐくみきこえさせたまへ。世の人に似ぬ御すまひに待るめれば、いとど見ゆづる方も侍らぬを」など、すこし言つづけて聞ゆる御けはひに、今宵ぞよろづは思し固めつる。

春宮は三条院と藤壷皇后との間の子、こゝで、皇后宮が心配する必要はない。これは春宮にかこつけて、我が子我身姫の事を、関白にたのんでいるのである。

巻五の女帝の死に関しての部分は次のようになっている。

帝は十一、春宮十にぞならせたまふ。上は、十六にて東宮に参らせたまひて、やがてその年、御国護ありて后に立たせたまひて、二十一にて御位につかせたまひしかば、今年二十七にぞおはします。かの院（嵯峨院）の御ことをのみかへすがへす思ひきこえさせたまへど、今は紛るるかたなき御行ひにのみ籠りおはしませば、今日ぞこのよし御使参りける。

さるは、故女院（嵯峨女院）より渡りまゐれるさまざまの御物の具ども、名ある古き物どもはさらにもいはず、年ごろ我が御世のさまざまなりける女の御物の具・遊び物まで、御荘御荘の事、さるべき文書などまで、大方なるやうにて頭弁承はりて、日ごろことさらにしたためければ、いとおどろおどろしきまで渡したてまつりたるふを、殿は、下りゐの帝しもこそさしあたりてかやうの御事はと、いとあやしう、え知らせたまはぬにやと思して、奏し返させたまへど、ただ「思ふゆゑ（女帝）ありて。今日、日ついでもよろしかなれば」とばかりぞのたるはせける。

総ての遺産を嗣子東宮に譲るのであって、この事は、既に、悲恋帝の死を、女帝は予測していたかもしれないのである。女帝と東宮の母・藤壷皇后との仲に、我身姫が介在する事は既に述べた通りである。

この物語が『我身にたどる姫君』と名付けられた由縁を記して来たが、本論は飽く迄、この物語の方法論であり、我身姫の存在は地模様的な様相を呈している。この物語の真の魅力は、こうした方法を用いながら、三条帝をめぐる四人の女性の愛憎や、人間の不合理さへの着目にある。その上、そうしたものを描きながら、猶その上に漂う、性の人間性への浸

蝕、その独立性にある。奇妙な程に男を退け、儒教的・浄土教的潔癖さを示す女帝の姿はその裏返された姿と見てよい。物語は総て密通によって進展して行く。不可思議な人間・人間関係の上に浮ぶ、油のような性の不如意性・独立性こそ、この物語に現代性を与えている要素なのである。

（本校非常勤講師）

注

（1）この人物は、通常の意味での主人公のように、必ずしも、それだけの重い役割を持った人物ではなく、巻二の途中以下では、むしろ脇役から端役に近い位置におかれているが、しかし、こうして形の上では、巻一～八を通ずる人物として、物語の統一性のシンボルになっているのである（今井源衛氏「我身にたどる姫君」第一巻P155）。

（2）今井氏は「父の故関白が死去の際、後涼殿女御が自分の子であることを、息子の三位中将に、遺言して、後事を託したか」とあるが、こう解釈すると辻褄が合わなくなる（同第三巻P140）。